

## 教育開発・学習支援室（旧教育開発支援センター）設立のご挨拶

本学は、教育活動の改善を支援してきた教育開発支援センターを発展的に解消し、教育開発・学習支援室を2021年4月に設置しました。主な目的は、教学理念「自立・共生・臨床の知」を踏まえた教育開発（支援）施策と学習支援施策を企画し全学的に実施するとともに、各学部・研究科や各教員の特色ある教育活動を継続的に支援することで、本学の教育の質向上に資することです。これからも、建学の精神に基づいた教学理念を実現するために、高等教育機関を取り巻く環境の変化に創造的に対応してまいりますので、皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

（室長）経営学部 経営学科 教授 平尾 毅

2016年4月に旧教育開発支援センターの専門教員として着任後、早5年が立ちました。手探り状態から始まりましたが、教育熱心な先生方にお声がけいただき、「京都橘大学生のより良い学びの実現のために」という共通目的の下、様々な教育開発に取り組むことができました。この度、教育開発支援に加え、学習支援やキャリア教育をさらに充実させていくために、2人のスペシャリストをお招きすることができたことを嬉しく思います。運営委員である各学科の先生方や教務課の皆さんとも協力し、学生と先生方のために尽力いたします。今後ともよろしく願いいたします。

（教育開発支援 担当）経営学部 経営学科 専任講師 西野 毅朗

4月から本学に着任しました、乾明紀です。主に学生のキャリア開発・形成に資する教育の開発を担当することになりました。よろしく願いいたします。大学でキャリアと言えば、就職や職業を指すことも少なくありません。しかし、語義に従って理解すれば、様々な経験を積みながら、過去を振り返ったり、未来を展望したりしながら歩いていくことです。したがって大学生活における様々な経験こそキャリア開発・形成の機会であり、その機会を構想し未来を展望することがキャリアデザインにほかなりません。このような視点で学生の“キャリア開発・形成力”を大いに高めたいと思います。

（キャリア開発教育 担当）経済学部 経済学科 准教授 乾 明紀

本年4月に着任いたしました、多田泰紘です。私はこれまで大学における学習支援に携わってきました。現在は、教育開発・学習支援室のミッションのひとつである、ラーニングコモンズの運用や周知、ライティング支援の展開に取り組んでいます。大学での専門は生物学で、大学院卒業後はレポート執筆や発表資料作成のアドバイスを行う学習支援職員をしていました。その経験を活かし、京都橘大学の学習支援をより一層盛り上げていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

（学習支援 担当）経営学部 経営学科 専任講師 多田 泰紘

## 2021年度 第1回 たちばな教育サロン 開催報告

2021年6月2日に、本年度第1回目の「たちばな教育サロン」をオンラインで開催し、教職員含めて36名の方にご参加いただきました。今回は「質の高い遠隔授業をいかに実現するか」をテーマとし、看護学部の野島先生と、発達教育学部の池田先生より事例報告をいただきました。事例報告の後は、ブレイクアウトルームを活用し、参加者同士でざっくばらんに意見交換する時間を設けました。参加者アンケートからは、「他の先生のご経験を聴くのは、どんなことでも参考になる点を実感しました。」「遠隔授業の悩みの解決に向けた意見をもらえてよかったです。」等のコメントをいただいています。以下は、事例報告のポイントをまとめたものです。何かしらの参考になれば幸いです。また本年度はあと2回、後期に開催予定です。ご都合がつくようでしたら、是非ご参加ください。お待ちしております。

### 報告1 「思考力を育てるオンラインシミュレーションの展開<災害看護学Ⅱを通して>」

看護学部 准教授 野島 敬祐 先生

野島先生からは、看護学科の専門教育科目である「災害看護学Ⅱ」において実践された、オンラインによるシミュレーション教育の事例をご報告いただきました。本科目は実技を行う演習教育であり、対面授業であれば、**患者模擬被災者に対して看護師としてシミュレーション**を行います。しかしコロナ禍の影響で対面実施が困難になり、遠隔でどこまでのことができるか大いに悩まれたそうです。

まず最初にされたことは、授業目標の見直しです。シラバスに記載していた各目標について、遠隔でも達成可能なものと、達成が難しいものを分類し、達成可能なものをいかに効果的に実現するかを検討されました。具体的には、学生を小グループに分け、各グループに1名の教員を配置し、教員が**模擬被災者**と、ケースに合わせた検査結果の伝達役（対面であれば学生自身が検査し結果を確認する）の2役を担うようにされました。またケースのイメージを視覚的に確認できるよう写真を画面共有し、患者の声はその場で教員が発して学生の問いかけに反応するなど、臨場感を出す工夫をされました。演習の後は、学生同士でデブリーフィング（振り返り）を行い、気づいたことを言語化し学びを促すようにされています。

オンライン授業は、対面と比べて検査技能を高められないデメリットがあるものの、対面時に行っていた特殊メイクや模擬患者の訓練等の準備時間が削減できるというメリットもあったそうです。

### 報告2 「オンライン授業を作るために考えていること<目的と状況に応じてルールと課題を変える>」

発達教育学部 教授 池田 修 先生

池田先生からは、特定の科目ではなく、2020年を通して遠隔化した複数の科目での実践を振り返り、遠隔授業を成功させていくための要点を整理してお伝えいただきました。

印象的だったのは、カメラの使い方です。表情発言（表情から真に考えていることが伝わる）を汲み取るためにも、カメラは原則オンで進められるそうです。また学生の個人作業中は画面をオフに、完了した人からオンにすることをルール化することで学生の状況も掴むことができます。カメラに写りたくない学生は、カメラが壊れていることにするというちょっとした工夫も重要に思いました。

他にも、学生自身に様々なモノづくりに挑戦してもらうことから学ぶことも積極的にされていました。例えば動画を作成させるだけでなく、それをYouTubeで配信することに挑戦したり、デジタル教育辞典の作成や、電子ブックの作成などです。オンライン授業を含め、ICTの活用が当たり前ようになっていく時代において、ICTツールを活用したモノづくりを通じた学びを学生に提供していくことの可能性を教えていただきました。

---

本サロンの様子は、[教育開発・学習支援室WEBサイト「学内FD関連動画」](#)よりご覧いただけます。